

「聴覚障害者へのサービス」

聴覚障害者に対する図書館サービスを考えるグループ 事務局
渡辺 修

「聴覚障害者に対する図書館サービスを考えるグループ」の紹介

1982年に、第15回全国手話通訳問題研究会の全国集会に「社会教育や図書館とろうあ者」分科会を設けました。そこに集まった手話を学ぶ図書館員の出会いと話し合いが契機となり、日本図書館協会障害者サービス委員会の中に「聴覚障害者に対する図書館サービスを考えるワーキンググループ」（現在の名称は「ワーキング」を取ったものに改称）を1984年に作りました。設立当時の活動計画は以下のとおりです。

- ・グループの主な目的は、聴覚障害者に対する図書館サービスのあり方を追及する。そのために、このテーマに関心のある人たちを広く募り、横の連絡をとり、情報の収集と提供を行う。
- ・聴覚障害者や聴覚障害者関連団体と連絡をとり、情報交換を行う。
- ・適宜活動報告を行い、マニュアルを作成する。

グループの会員には、障害者サービス委員会以外にも、このグループの主旨に賛同していただける人は、誰でも参加できます。聴覚障害のある会員もいます。参加希望の方は渡辺まで。

1. 聴覚障害者といっても様々

- (1) ろう者
- (2) 難聴者
- (3) 中途失聴者
- (4) 手話も文字言語も使わない人（適切な教育を受ける環境になかった聴覚障害者など）
- (5) 加齢により聴力損失した高齢者
- (6) 聴覚障害と他の障害が重複している人（盲ろう者など）

2. 聴覚障害者のコミュニケーション手段

(1) 手話（日本手話、日本語対应手話、中間型手話）

- ①日本手話：日本のろう者が日常的に用いる「言語」である。単語を並べる規則（文法）意味、用法は独自なもので、日本語を手で表現したものではない。
- ②日本語対应手話：ほとんど日本語と同じ順番に手話を使う。
- ③中間型手話：日本語を基盤に持つ中途失聴者や難聴者が、自分たちにも使いやすいように変化させた手話。日本語に対応しているが、日本語対应手話ほどではない。

※ 「シムコム (Sim-Com; Simultaneous Communication) 」

元々の意味は、口話と手話を同時に使うコミュニケーション方法を意味した。そこから、日本語対应手話や中間型手話を「日本語と手話を同時に表現したもの」として「シムコム」と呼んで、手話と区別している場合がある。また、中間型手話を日本語対应手話に含めている人々もいる。但し、「シムコム」も中途失聴者や難聴者が使うコミュニケーション手段として認めている。

(2) 指文字

(3) 口話（読話、発語、聴覚口話法）

口話は、相手の話していることを推測しながら、自分の発言が聞こえにくい（聞こえない）なかで話す方法なので、聴覚障害者に大きな負担をかけます。

ですから、口話で話している聴覚障害者とコミュニケーションする場合は、次の4つの点に注意して下さい。

第一に、あなたの顔が相手の正面から見えるようにしましょう。その時、あなたの顔が後ろから逆光を受けていたり、あなたの後ろに鏡やチカチカしている光などがあると、あなたの顔が見づらくなるので注意しましょう。

第二に、声をやたらに大きくする必要はありませんが、はっきりと、早口にならないように話しましょう。

第三に、聴覚障害者が話している発語は、慣れないと聞き取りにくいものです。言っていることが分からない時に、聞き手であるあなたが不安そうな表情をするのは禁物です。

なかなか通じない場合は、はっきりとその事を相手に伝えて、言い方を変えてみたり、紙に文字を書いて筆談してみてください。

第四に、補聴器も使いながら、口話をしている場合もあるので、騒音の少ない場所を選んで話して下さい。なぜなら、補聴器は、周辺の騒音まで増幅してしまう可能

性があるからです。

(4) 筆談

(5) 補聴器を使用する

補聴器は、音を拡大して耳の「外耳」から「中耳」に伝える装置です。医学用語では、この耳の「外耳」から「中耳」の部分を「伝音部」といい、主に音の振動を感じる役割をします。

「中耳」の奥を「内耳」といいます。「内耳」より先の、「神経」と「内耳」を併せて「感音部」と呼んでいます。「感音部」は、「伝音部」から伝わる音の振動を電気信号に変えて、脳に伝える役割をします。

「補聴器」は、「伝音部」に障害がある場合に有効に働きます。音を電気信号に変えて、神経系統に伝える「感音部」に障害があったり、「伝音部」と「感音部」の両方に障害のある場合は、補聴器は有効に機能しない場合があります。

(6) 様々なコミュニケーション手段を総合的に使う

3. コミュニケーションの保障

(1) 手話と手話通訳

(2) 筆談と筆記通訳

(3) 補聴援助システム（磁気誘導ループ）

補聴器利用者が、雑音が発生しやすい場所でも、聞きたい音をうまく聞こえるように助けるのが「補聴援助システム」です。幾つかの種類がありますが、ここでは受信機として、補聴器利用者自身が使用している補聴器をそのまま使える「磁気誘導ループ」を紹介します。

たいていの「補聴器」には、2つの機能があります。1つは音を大きくする機能と、もう1つは「誘導コイル」と呼ばれる磁気を検知する機能です。「誘導コイル」は、「テレホンコイル」とも呼ばれ、もともとは電話の音をはっきり聞くために開発されたものです。受話器の音を補聴器の内蔵マイクで直接拾うと、ひずんだ音になります。

そこで、電話機から発生する磁力の変化を内蔵マイクを通さず、直接「誘導コイル」が拾い上げ、電流変化を生み出します。この変化を増幅すると、電話機からの

音声信号だけが明瞭な音として、補聴器で聞くことができます。

この機能を応用したものが「磁気誘導ループ」です。「磁気誘導ループ」は、話す人はマイクを使います。そのマイクで話した言葉は、電流に変えられて専用のアンプを通して、補聴器利用者の周りに設置してある電気コードなどに流れ「磁力」を発生させます。

その「磁力」を補聴器に内蔵されている「誘導コイル」が拾い、電流変化を生み出させます。この変化を増幅すると「マイク」からの音だけが、騒音がない明瞭な音として補聴器で聞くことができます。

- (4) 通信機器（ファックス、音声拡大電話「めいりょう」、メールなど）

4. 聴覚障害者への図書館サービス

- (1) 手話・字幕付の映像資料の収集と制作

*字幕付映像資料の制作を希望する図書館に、日図協は字幕挿入システムを貸出します。希望館はぜひトライしてください！！

- ・「聴覚障害者のための利用案内 2005年版」

枚方市立中央図書館 障害者・高齢者サービス映像スタジオ

- (2) 手話を主体に作られた映像資料

- ・「手話 ごんぎつね」DVD (2009年度IBBY(国際児童図書評議会)障害児図書資料センター推薦図書)、ろう学校小学部国語副教材として制作
熊本県聴覚障害者情報提供センターTEL096-383-5595

- ・「日本手話とろう文化 1～3」DVD 聾市場 制作
「日本手話とろう文化」書籍版 木村晴美 著、生活書院 発行

- ・「ろう者の日本語と聴者の日本語のズレ 講演シリーズ010」DVD
有限会社手話文化村、FAX03-5421-1937

- ・「ない方がマシ?ないよりマシ?こんな手話通訳! 講演シリーズ015」DVD
有限会社手話文化村、FAX03-5421-1937

- ・「驚きの手話「パ」「ポ」翻訳」書籍+DVD付き 関西手話カレッジ・
有限会社手話文化村 編、株式会社星湖舎 発行

- (3) 読みやすい本（リライトされた本、マンガ、絵の多い雑誌など）

- ・児童書と視聴覚資料を一般図書と同じ書架に混排してみませんか。

- (4) 対面手話
- (5) 聴覚障害関係資料の収集と提供
- (6) 聴覚障害者のコミュニティーに関連する行事の開催（邦画の字幕付映画会や成人向けの手話によるブックトークなど）
- (7) 聴覚障害者情報提供施設との連携
「聴覚障害者の理解のために」DVD
熊本県聴覚障害者情報提供センター TEL096-383-5595
- (8) 聴覚障害者サービスのための機器、施設・設備
・枚方市立中央図書館の写真紹介
- (9) 手話によるおはなし会
 - ・枚方市立中央図書館「手話で楽しむおはなし会」ビデオ紹介
 - ・八王子市立図書館「手話によるおはなし会」写真紹介
立川ろう学校生徒などを招待し、聴覚障害職員などが実演
 - ・白山市松任図書館「手とおはなしの会」
「白山市松任手とおはなしの会」が実施
 - ・「手話をまじえたおはなし会」学習グループ
活動拠点：熊本県聴覚障害者情報提供センター

5. 参考文献

- 『聴覚障害者も使える図書館に 図書館員のためのマニュアル 改訂版』日本図書館協会聴覚障害者に対する図書館サービスを考えるワーキンググループ編、日本図書館協会、1998
- 『聴覚障害者に対する図書館サービスのためのIFLA指針 第2版』ジョン・マイケル・デイ編著、日本図書館協会聴覚障害者に対する図書館サービスを考えるワーキンググループ訳、日本図書館協会、2003
- 『障害者サービス 補訂版 図書館員選書12』日本図書館協会障害者サービス委員会編、日本図書館協会、2003